

ほなない歴史通信

第54号
2010.3.1

環境を切り口にした連携への期待

本誌第五号において、森林面積の多い山間部の自治体の場合、都市部と連携し、多様な交流を通じて都市住民の活力を導入し森林再生、ひいては地域再生を図ることの重要性について述べた。今回はその続編として、新たに始まった大子町とつくば市の交流についてふれてみたい。

昨年の九月以降、民主党を軸にした連立政権が誕生したことによって政策立案のスタンスは大きく変わった。それは、地球温暖化対策の分野においても然りである。鳩山政権発足直後の九月二二日、鳩山首相は国連気候変動サミットの開会式で演説し、九〇年比で二五％という二〇二〇年までの日本の温室効果ガス削減目標を提示するとともに、国内排出量取引制度、再生可能エネルギーの固定価格買い取り制度の導入、地球温暖化対策税の検討をはじめ、あらゆる政策を総動員して実現をめざすとその決意を明らかにした。また政府与党は、現在開会中の通常国会に地球温暖化対策基本法（仮称）案を提出し、二五％の削減目標を明記すると同時に排出量取引制度の創設も盛り込む予定だと伝えられている。自公政権のもとで先送りされてきた排出量取引制度がようやく具体化されそうである。

近年の動きでもう一つ注目したいのは、国に先んじて東京都が二〇一〇年四月から排出量取引制度を導入することである。対象は温室効果ガスの排出量が相当程度大きい事業所（約一三〇〇）に限られるが、基準となる排出量を自らの努力で削減するか、あるいは他者から取得するか、いずれにしても削減が待ったなしの課題となっている。国の政策動向とも絡んで、こうした取り組みは今後急速に広がるものと思われる。

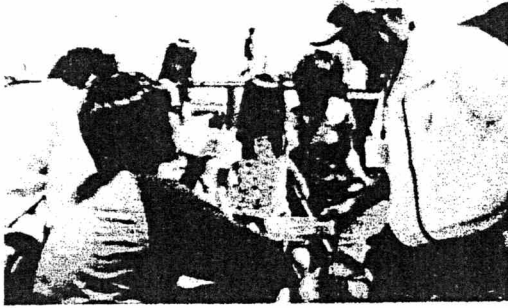
国の内外で地球温暖化対策が急がれるなか、二〇〇九年一月一七日、大子町とつくば市は「つくば市と大子町との地球温暖化対策等のための連携に関する協定」を結んだ。その目的を、次のように謳っている。「この協定は、（中略）環境の分野において相互に協力し、乙（大子町）の町有林の森林整備を行うことによる地球温暖化対策を目的として締結する」（第一条。つまり、つくば市から出る二酸化炭素の排出量を、大子町の町有林を整備することによって増える二酸化炭素吸収分で埋め合わせる仕組み（カーボンオフセット）を実現しようとのねらいである。その対象地として、大子町大字浅川の町有林四三ヘクタールが「つくばの森」と設定された。森林を整備するには資金が必要だが、前記協定と同時に作成された「つくばの森の森林整備費用に関する覚書」によると、つくばマラソンの開催により排出される二酸化炭素排出量をつくばの森の森林整備で吸収させることから、つくばマラソン実行委員会が費用を負担する形となった。こうして、両自治体にメリットのある仕組みが動き出した。

早速提供されたのが、同年一月二〇日開催のつくばマラソンの参加費から捻出された五〇万円である。ささやかではあるが、まず一步である。森林が木材生産の場だけでないことが示された意味は大きい。同様の仕組みを活かす場合は、大子町にはまだまだある。今後のさらなる拡がりに期待したい。（齋藤）

町内主な河川の水質と水生昆虫について

大子くらしの会長 笹川昌子

大子くらしの会は、昭和五十一年に消費者の権利を求めて発足し、現在、事務局を役場企画観光課におき、約五十名の会員により活動をしています。グローバルな情報社会にあつて、消費者をとりまく環境が急速に変化している中、当会としては、食の安心・安全の問題はもとより、悪質商法撃退法の啓発活動、地球温暖化防止活動など、さまざまな問題に取り組んでいます。本稿では、三年前より実施している「町内主な河川の水質と生き物について」調査した一端について紹介いたします。



久慈川の水質と水生昆虫調査風景（やな場）

大子くらしの会は、かけがえのない美しい環境を次世代につなげていくことを目的に調査し、その結果を大子まつり等の多くの人が集まる場において、パネル展示等を通して広く周知したいと活動しています。

全国一斉の水質検査の日に、県環境アドバイザー宮田國敏先生のご指導により、町内の河川の水を採取し、パックテストによるCOD（化学的酸素消費量）や水生昆虫の調査をしました。調査にあたっては、こどもエコクラブ八溝自然探検隊と世田谷おやじの会（世田谷区元PTAの父親達や

子ども達と自然体験を通して都市と農村の交流を図っている団体）の参加・協力をいただき、総勢三十名で実施致しました。当日は、天候にも恵まれ、晴天の中で実施することが出来ました。調査の結果は左記の通りです。

町内主な河川の水質検査 平成21年6月7日（日）晴

	河川（場所）	COD
1	丸木の水	0
2	八溝川	2
3	入山川	2
4	押川（永源寺橋付近）	2
5	久慈川（やな場）	2
6	浅川	4
7	滝川	4
8	久慈川（西金）	7
9	高瀬川（生瀬）	8

- ・CODの数値が高いほど汚れています。家庭の排水などが汚れの原因になっています。
- ・水質をこれ以上汚さないようにしましょう。

川の水質もおおむね良く、カワゲラ、トビゲラなど、きれいな場所に生息する生物が多く見つけられました。また、シマドジョウや鮎なども観察できました。その他、水生昆虫ではありませんが、アオサギ、オハグロトンボ、ツバメなど飛び交う姿も見られました。

これからも、自然豊かな環境を守るために、毎年調査を実施し、さまざまな機会を通して私達に出来ることは何か、多くの人に知ってもらいたいと思っています。なお、長年にわたり環境問題に取り組み活動をしてきたことにより、昨年「環境保全県民会議」より表彰されました。今後も関係機関との連携のもとに活動を展開していく所存であります。

和紙人形美術館の「倭紙芸鄙美式人形」

奥久慈茶里公園理事長 荒井正治

ある日の朝、社会教育課の事務室で、読売新聞のコラム欄での漫画家水木しげるの記事が話題になった。「ある不思議な人形作家の死」という内容で、大子町山田で人形創作をしていた山岡草さんの話だった。たまたま山岡さんが住んでいた家の大家さんと知り合いの職員がいて、遺族に作品の消息をたずねたことが、大子町に人形が寄贈されるきっかけになった。

平成七年に遺族から全作品の寄贈を受け、平成十二年度に茶の里公園内に、山岡草創作和紙人形展示館を建設。その後、現在の「和紙人形館」として、リニューアルオープンされた。

山岡さんは、和歌山市の紀州和歌山城近くの木広町生まれで、人形造りのきっかけは、小学校四年生の時「泣いている子に、そばにあった紙を丸めて持たすと笑顔に変わった。その時から紙の魅力に取り憑かれた」として、身の回りの紙を利用して自分が楽しむ程度だった人形造りから、手漉き和紙だけを使って本格的な人形造りをするようになった。

粘りがあり、暖かい温もりが漂ってくるとして「和紙を使って鄙びた美しさを残していきたい」と、昭和四十五年「倭紙芸鄙美式人形宗家」として創作活動を始める。

山岡さんは、華道「嵯峨流」の師範として、約二百人程度の門下生の指導をしていたが、一大決心の末華道を捨てて、人形造りに専念することになった。「草の気持ちを思うと、華道のこととはあまり触れてほしくない」と、和歌山にいるお姉さんの玉置さんは話していた。

東京に工房を置き創作活動に専念したが、昭和五十四年に創作活動の新天地を求めて、全国を行脚する途中で、大子町下金

沢の鷺ノ巣バス停に降りたところ、鷺が創作の地として、山田に導いてくれたという。山田の豊かな自然の中で「紙の心」を求めて創作活動を開始した。平成七年、六十五歳の生涯を閉じるまで、多くの作品をこの地で作り上げた。

代表的な作品として「日本の神々」があるが、美術記者の芥川喜好氏は、次のような論評をしている。

山岡草の生み出す和紙人像の群れは「人形」という言葉をもつ、乾いたオブジェ感覚とは全く対極に位置しているとも言える。自然の染料で染めた和紙を渾身の力で絞り込み、捻りあげ、組み上げる。紙のうねりそのものが、さまざまな生命の形をなしてゆく。小さな頭があり、手も足もある。天から降ってきたものとも、地中のエネルギーが下から噴出して凝結したものとも見える。もはや人形という反自然を越え、コレクションされることも拒否し、この国の山野に生き続ける神々の相貌がそこにある。最も根源的意味で、山岡草の造形世界を代表するのは「日本の神々」シリーズだ。素材の処理、色、形態、そこに生じる存在の気配すべてを含む、紙という素材がこれほど強固な造形力を持って世界の中に突出ししてくること自体、驚異というべきだろう。

一度でも美術館を訪れた人は、芥川氏のこの評にうなずけるのではないだろうか。

作品は人形の他に、書、絵、そして奥久慈の四季を背景に野に遊ぶ童人形のスライドを制作しており、晩年の創作活動とし癒したことがメモに残されていた。観る人に郷愁を覚えさせ、癒しを与えてくれる数々の作品は、子どもから年配の方まで心に語りかけ、感動を与えてくれることは必至である。

大子町の宝として、町民の宝として、未永く大切にしていきたいものである。

【昭和の初め頃の農家の仕事】 自給自足一 油締め

その頃農家では多くの食品を自分の家で作っていた。例えば米や野菜の外毎日のように使う味噌、醤油、油なども作る農家が多かった。

食用油は農家で作る菜種、落花生、ごま、エゴマ（じゅうね）などが主な原料だった。そのほか榎の実、茶の実、椿の実などからも油を絞った。

油締めと言って比較的大きな道具を使うので、どの家にもあるという道具ではなかった。そこで隣近所の数軒が集まって協力してやる事になる。

図のようにかなり太い材木を使った道具である。

1は油を絞る材料を入れるもので五、六〇センチの太さがあり、真ん中に直径三〇センチ、深さも三〇センチほどの丸い穴があり、そこに材料を入れる。その上に三〇センチ程の厚さの木の蓋をのせる。

2は上下左右の材木を組み立てた様子で、農家の太い梁に倒れないように綱で結んである。

油をとる菜種などの原料は、蒸してから布袋に入れ1の穴に入れる。布袋の上下には竹の簀の子を敷き、その上に厚い木の蓋を載せる。その蓋の上に横に長い角材3を通し、くさびで1に固定する。

こうして準備が出来ると、大人が二人両脇に立ってかけや（大きな木のハンマー）で同時にくさびを打ち始める。くさびを打つに従って3が下がりの中の菜種などが圧縮され油がしみ出してくる。1には油の出る穴が開いているので、油はその穴から流れ出し容器に溜まる。

難しいのはくさびを打つ二人が同時に打たなければならぬ

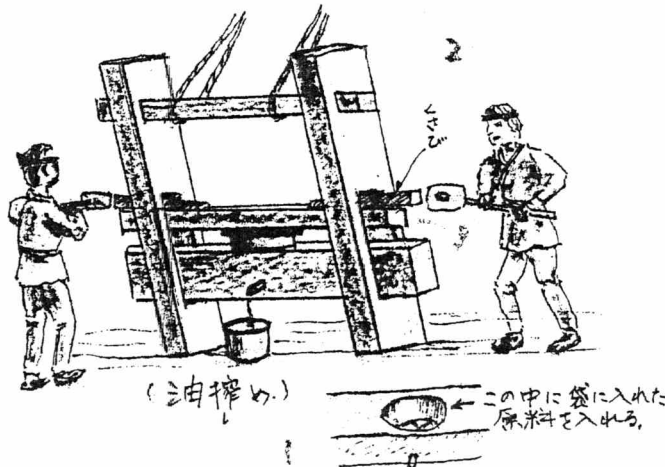
い事だ。一方だけが打ったり、あまり力が違いすぎると、くさびが飛んだり道具の故障の原因になる。

こういう比較的大がかりな道具を使うので、少しばかりの原料で時々やるという事は出来ない。油をとる原料を出来るだけ多く集めて準備をして置くことが大事だった。一年に一回或いは数年に一回くらいしか出来なかった。

その日は朝早くから集まって、蒸したり絞ったりと忙しく働いた。なにしろ三、四軒集まってやるので夕方までかかる事もある。

農家では油を絞る原料になる菜種などを畑に作って貯蔵して置いたり、木の実を拾い集めて置いたりするので。大豆とか綿の実などはあまり使わなかった。

こうして絞った油はその当時は一年間或いは数年間使う貴重なものであった。



(石井)

「水戸藩の改革と桜田門外の変」について

水戸藩開藩四百年を記念して「桜田門外の変」が映画化がされることになり、大子町でも支援の会が発足した。そのころ、一月十五日に、元佐竹高校長の野上平先生の講演を聞いたので、その講演を紹介しよう。

水戸の天保の改革は全国に影響を及ぼした。水戸藩は、当時二六〇〜二七〇あった藩の中で、御三家の一つ、石高は、尾張の六一万石、紀伊の五万石に比べて三五万石、少なかった。水戸は常府制で、江戸在住、参勤交代がなかった。いつも、藩士四〇〇〇人の内の四分の一は江戸に住んでいた。副将軍と呼ばれたと言うが、正式名はない。水戸学は、儒学と日本の神道を結びつけたもの。水戸は人材が多かった。天保期に会沢正志斎、藤田東湖がでた。二人の名君、光圀と斉昭がいる。NHK「篤姫」では斉昭役を江守徹、その前は、菅原文太、今度は北大路欣也がやる。水戸の地理的状况もある。江戸に近く、九〇キロの海岸線がある。海防に関する地理的条件がある。

九代斉昭はどういう人か。寛政十二年、一八〇〇年に生まれた。光圀が死んで一〇〇年後、光圀の生まれ変わりと言われた。当時は、農村人口が減っていく時で、光圀の時は三〇万人だが、斉昭の時は二二万人という、そのような時代を考えるべきだ。光圀は義公という、斉昭は烈公という。光圀の時は元禄バブルの頃、斉昭はどん底で生まれた。農村の立て直しが必要であった。光圀は官僚制度の整ったとき。二人とも、教育、文化、医療に力を入れた。光圀は彰考館、斉昭は弘道館と各地に郷校をつくった。二人は本をたくさん書いている。二人は領内に来た回数が多い。

斉昭を話すときは、ライバルの井伊直弼と比較すべきだ。き

わめて境遇が似ている、斉昭も、直弼も殿様になれるような人ではなかった。直弼は譜代大名の筆頭、彦根十四代藩主直中の十四番目の子、斉昭は三番目、敬三郎といった。次三男以下は部屋住みであり、居候、養子縁組を待っている。直弼は兄がみんな養子になってしまった。斉昭は兄の斉脩が死去して、水戸は大騒ぎになった。なぜか、当時は財政ピンチで、二人の名前が出てきた。一人は清水恒之丞、御三卿の一つ、十一代將軍家斉の二十番目の子、斉脩の奥さん峰姫の弟、將軍家から持参金を持ってくるのではないかと、榊原など水戸の名門が押した。七代治紀の子がいるのではないかと、改革派は敬三郎を押しした。会沢正志斎、藤田東湖、豊田天功、武田耕雲斎、戸田忠敏など。斉脩の遺書があった。弟の斉昭に、とあった。この二つの争いが水戸藩の不幸だった。大日本史編纂でも分裂があった。

斉昭の改革が断行された。斉昭は幼少の頃から政治に関心を持つ。放生会、鳥をとばすことを止めて、そのお金を貧民に配ってはどうか。仏教に対する憎しみを持つ、農民は苦しい生活をしている、政道を改めるべきだ。それに対して、直弼は、埋木舎と号して、お茶や風雅なことをしていた。斉昭の改革で、東湖を郡奉行に、常平倉（豊作の時に米を買い、不作の時に売る）を造る、検地を行う、土地を測量し直す。海防に関心を持つていた。助川に海防館を造った。太田に益習館を造った、水戸の弘道館より四年早い、館長は薩摩出身の日下部連である。野口時擁館を造る、神官が学んだ、斎藤監物や鯉淵が学んだ。しかし、斉昭が藩主になってすぐに飢饉がおこった、天保四年は作況が三〇、天保七年は作況が一五〜一六。幕府は斉昭の改革を表彰したが、数ヶ月後、謹慎処分をした。七項目の罪状があり、蝦夷地の開拓、浪人を集めて軍事訓練をした、お寺を取り潰したなど。寛永寺や増上寺の反対があった。斉昭の下で、藤田東湖ら改革は、天狗派と、結城寅寿ら門閥派に分かれた。天狗はなりあがり、少し天狗になっていくという。突然の斉昭

の処分で門閥派が息をふきかえす。その頃異国船がやってくる。老中阿部正弘ら四老公（越前松平慶永、宇和島伊達宗城、薩摩島津斉彬、土佐山内容堂）に海外への危機が高まる。会沢正志齋が「新論」、藤田東湖が「弘道館述記」を著し、幕府を批判する。「新論」は筆写されて伝わり、やがて、吉田松陰も水戸にやってくる。「新論」は安政年間に活字化された。

一八五三年にペリーが来航、この時に、斉昭は海防参与になる。神崎寺で大砲を造る、お寺の鐘で造る。江戸の藤田東湖は横井小楠、橋本左内（越前慶永の家来）、松代藩の佐久間象山、西郷隆盛と交遊する。一八五四年の日米和親条約で海防参与をやめ、斉昭は水戸藩の安政の改革に専念する。「海防愚存」の意見書を出す。その本には、付箋があり、「米英と戦えば負ける、和親をふうじて海防をすすめる。」この付箋を勝海舟は読んでいた。安政の改革で、郷校を造る、町田、小菅にも造り、地域の有力者を育てる。医学・古典・地学ばかりでなく、武術の勉強を教えた。那珂湊に反射炉、製鉄所を造る。時間をかせいで軍事力をつける。内戦外和、教育に力をかけた。水戸藩の不幸は十二月二日の安政の大地震で、藤田東湖と戸田忠敏が圧死する。藤田と戸田は水戸の二田、両田と言われ、生きているときは、ブレーキがきいた。ここから、松平慶永は「老公が失策が多くなつた」という。

將軍の継嗣問題と日米修好通商条約の問題が起る。後継ぎは、紀伊慶福（家茂）八歳と一橋慶喜。慶福の南紀派は、「直弼・有力譜代大名・大奥」。慶喜の一橋派は譜代大名から雄藩連合へ、島津斉彬は大奥の工作として「篤姫」を十三代家定へ、うまくいかなかった。直弼が四月二十三日に大老に就任して、実行する。六月十七日に日米修好通商条約を朝廷の認可を得ないで調印する。六月二十四日に斉昭が不時登城する。島津斉彬、阿部政弘も死去、斉昭は孤立する。七月五日に水戸では農民も含めて、大挙して押しかける、雪冤運動、南上という。戊午の

密勅「幕府のやっていることは間違っている。水戸藩で受け取つたら他の藩に伝達しろ」の工作に日下部伊三治（益習館長の連の子）、鶴飼吉左衛門（京都の留守居役）、西郷隆盛（誠忠組、水戸に同調している）などが加わり、本文は鶴飼が東海道を、控えを日下部が中山道で運ぶ。この密勅の返納をめぐる鎮派（会沢正志齋、おさえる）と激派（金子、高橋ら、そのとおりやれ）に分裂する。安政の大獄で直弼は水戸藩を弾圧する。梅田雲浜、鶴飼親子、安島帯刀（戸田の実弟）、茅根伊予之介らを拷問し、獄死させる。水戸藩の勅返納を阻止するために長岡（茨城町）に屯集する。このように政治を動かすのは武士ばかりでなく、神官など、下へ下へとおりていった。「早く返せ」と「周りに伝えよ」に分裂する。

長岡屯集の残党の一部は大老暗殺へ。これは、長州、薩摩と連携をとる。直弼を暗殺して、金子孫二郎は江戸で旗揚げ、高橋多一郎は関西に行き、幕政改革を図る。直弼、安藤信正、高松藩主頼胤の三人の暗殺を企てたが、とてもできない、まず、一つにしぼる、直弼を暗殺する。実行隊長は関鉄之介、軍資金を集める。郷校は、武士と農民の出会い場で、袋田の桜岡家ばかりでなく、関は、旧水府村の後藤権五郎に、付近の豪農からご用金と称して募金にあたらせた。あちこちから集めた。長州を頼みとしたが、情勢が変わる。島津斉彬の死去で、島津久光ら穩健な公武合体派が主導権をにぎる。水戸に共鳴していた薩摩、長州は、尊皇攘夷から尊皇倒幕に変わる。御三家の水戸藩は限界があり、取り残される。坂本龍馬がでて、国内で争うのではない、植民地になる、国をまとめて薩長連合へ。「桜田門外の変」は、頼りとする薩摩が反対であった。大きな光を放つた水戸藩の「新論」には日本国家、国民という意識がある。日本と言うことを考えて戦った。斎藤監物の辞世の句、「国のため つもる思いも 天つ日に とけてうれしき けさの淡雪」。桜田門外の変で、日本の近代化が早まった。（文責 野内）

桜田烈士関鉄之介の袋田・生瀬での隠遁生活

病気に苦しみ、治療に追われながらの生活

万延元年（一八六〇）三月三日（旧曆）江戸幕府の大老井伊直弼を暗殺した水戸浪士の一人、実行隊長関鉄之介は、事件後同志野村彝之介等と町人に変装し、後事をはかろうとして江戸を脱して西国に向かった。さらに一行と別れて薩摩に入る予定であったが受け入れられず五月十八日引き返し、江戸に向かった。袋田に至るまでの足どりについては不明であるが、やがて鉄之介は保内郷（大子町域）に至り、常陸国久慈郡袋田村の桜岡源次衛門を頼り、桜岡家の屋敷地内にある蒟蒻会所に潜伏した。鉄之介が袋田へ到着したのは七月中旬下旬頃だろうと言われている。

桜岡家は久慈郡の山間部に居を構え、義侠をもつて知られる豪農であった。桜岡源次衛門と鉄之介との関係は、北郡奉行所の下役人時代からのつきあいがあり、前北郡奉行高橋多一郎、奉行野村彝之介の意をうけた鉄之介は、源次衛門の屋敷内に蒟蒻会所を設立するとともに源次衛門を仕法掛にした。これによって源次衛門は、保内地方の蒟蒻製造業者を支配することになり、豪農としての揺るぎない地位を確立していく。源次衛門自身も関の志士としての振る舞いに心を寄せていたので、大老暗殺時の軍資金二百両を提供するなど、親密な間柄にあったといえる。

このような関係から鉄之介は、源次衛門を頼り、源次衛門の屋敷内の蒟蒻会所に潜伏し、隠遁生活を送ることになった。

鉄之介の隠遁中の生活（逃亡生活）について、病気の治療をしながらいかなる心境で生きたかは、彼が綴った『庚申転蓬日録』や『万延転蓬日録』に残されている。

蒟蒻会所に潜伏した鉄之介は、しばらくしてから病氣治療のために白河（現在の福島県白河市）に行く。どんな治療を受けたのか。日記の中から二、三紹介しよう。

八月十三日（万延元年）

未明袋田出、桜源三両子召連、月居峠越、小生瀬、高柴、外大野より山越して塙領（奥州）へ入る。

此日、棚倉泊まり、吉岡屋某、石路険にして奇なり。

八月十四日昼時分、白河本町辻屋彦太郎へ投ず。棚倉より六里。白河で北条幽林蘭家の治療を受ける。

八月十五日

中町久下田屋某へ移る。

旅中病あれば、とても杯もとらず、常になく晴行月を見て物淋しくそ臥にける。

八月十六日

薬餌貼敷ひかき

禁忌北条幽林蘭家 久下田屋止宿

五辛 ゴボウ 油氣 芋 海魚類 トウナス

右の外凡て油氣多きものは忌む。海魚にても品によりてかまひなし。

かひ類 川魚類 野菜類

右大体の軽き品は持ちひて不苦よし。

（幽林がさける食べ物としてあげたのは、からいもの、油氣のあるもの、海魚の類、ごぼう、とうなすを挙げている。この外、油氣のあるものは全て禁止された。魚も品によつてはよい（白身の海魚）。たべてよいものは、貝類、川魚類、野菜類等を指

示している）

八月十六日より服薬

一、煎薬五貼、一日三服つづ

一、膏薬紙七枚。一日一度朝計服し申し候。

夕七つ半時、北条子来る。腫物へ針を指す。

瘀血を脱する事、はまぐり六貝程と云。疵口よりたはしる流る

事一夜。十七日朝は少々薄くなる。

十六日の夕方、医師北条幽林が鉄之介のもとへ診察に訪れている。鉄之介への診察状況を吉村昭著『桜田門外ノ変』は次のように記している。

「その日の夕方七ツ半時（五時）頃、幽林と弟子とともに再びやってきた。胸にできた腫物の汚血をぬくと言ひ、銀色に光った針を取り出し、焼酎で消毒して吹き出物を横刺しにした。鉄之介は、余りの痛さに身をのけぞらせ、歯を食いしばった。

『針は刺したままにしておきます。また参ります』

幽林は席を立った。傷口から赤黒い血が流れ、あてた布もすぐ赤く染る。彼は横になつて痛みに堪えていた。

明け方近くになつた頃、痛みがうすれてまどろんだ。朝、目をさますと、吹き出物の腫れはかなりひいていた。中略、薬と食餌療法が好影響をあたえたのか、咽喉の渴きが幾分弱まったように感じられた。幽林が来て、針をぬいてくれた」とある。幽林は糖尿病（糖尿病）と診断をしている。

白河で八月二十二日まで滞在し、治療を受けていた鉄之介は、二十二日支払いを済ませ、白河を出立し帰途についた。途中棚倉白木屋某へ泊まり、二十三日久隆峠經由、外大野、内大野、高柴、夕七つ過ぎ頃小生瀬の大藤家に帰着した。しばらく大藤家に滞在して生活をしていたが、九月七日に再び袋田に戻り、菟藟会所に潜伏した。

年がけて文久元年（一八六一）に入ったが、鉄之介の病状は好ましくなかったようである。この頃、彼は再び難病に苦しみ、一月十二日大藤勇之介を連れだつて幸手（埼玉県）に向かった。十五日に到着し、釜屋へ宿泊した。十七日より、木村屋市太郎方に宿泊し、医生秋間雄介の治療を受けている。日記に「木村屋に在りて眼疾湿瘡脱肛加之口中腐爛食物不入、口疾殆纏身故姑筆欠く」とある。鉄之介は、長期滞在して治療を受け、三月十三日

木村屋を辞し、帰路につき、同十八日の午後袋田桜岡邸（菟藟会所）に帰着した。

吉村昭著『桜田門外ノ変』のあとがきに、彼の顔には吹き出物があり、性病と称しているものがあるが、日記に記されている医者の療法、投薬などから順天堂大学医学史学研究室で検討した結果、糖尿病（糖尿病）であることがわかったと記している。

菟藟会所に潜伏中の鉄之介は、持病の治療に追われる生活であったが、漢詩や和歌の力量があり、和歌一四三首、漢詩五十二首、長詩六詩を残し、優れた詩人としての一面を持っていた。

鉄之介は、文久元年四月に桜岡家に見送られて、保内郷から姿を消したが、鉄之介への探索がきびしくなり、隠れ家に困り、いったん保内郷にもどり、生瀬地内に潜行した。最後は高柴村大沢の洞窟に隠れた。しかし、日を追って幕府、水戸藩の鉄之介への探索がきびしくなり、八月下旬生瀬の地を離れ、奥州を経て、さらに越後へと逃げた。文久元年十月、ついに越後の湯沢温泉でとらえられ、水戸の赤沼に送られた。翌年四月江戸の小伝馬町に送られ斬首された。享年二十九歳であった。（小澤）

編集人

齋藤 典生（茨城大学人文学部）
野内 正美（茨城県立日立商業高校）
石井喜志夫（元 教員）
小澤 閑彦（元 教員）
齋藤 裕也（大子町教育委員会）

編集発行

遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室気付

〒三二九一三五二六久慈郡大子町池田二六六九番地

TEL 0295-7212627